

# 平成30年度 佐賀県立武雄高等学校 学校評価計画

## 1 学校教育目標

高い志と未来を切り拓く力を持ち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する

## 2 学校経営ビジョン

創立110年目の歴史と伝統の下、校是：「質実剛健」「報恩感謝」の精神を基調に、高い志を持ち人間性豊かな生徒を育成する。

- ①6年間の一貫した方針のもと中高一貫教育の推進、充実・発展に努める。
- ②生徒の進路目標の実現のため、自ら学び考える態度を育み、学習への意欲向上や習慣化を図り、将来を見据えた教育実践に努める。
- ③教育活動全体をとおして、自他の存在を尊重することを基本とした指導を行い、安全・安心の学校環境づくりに努める。
- ④生徒・保護者・職員にとって、満足度の高い信頼される学校づくり、地域を愛し、地域から愛される学校づくりに努める。

## 3 本年度の重点目標

- ①高い志を抱いた生徒一人ひとりの能力・個性を伸ばし、継続性を持った中高一貫教育の推進
- ②基礎から応用までの教科指導の充実や、生徒が深く考える活動を通しての進路目標の実現
- ③アクティブ・ラーニングやICT利活用を手段とし、主体的な学習活動ができる授業の推進
- ④佐賀を誇りに思う教育やグローバル教育の推進による、地域や国際社会の発展に寄与できる人材の育成
- ⑤様々な教育活動や生徒支援による、心身の健康の増進と豊かな心や想像力の育成
- ⑥保護者や地域との連携を深め、広く共感と信頼を得られる学校づくりの推進
- ⑦教職員の指導力向上、働き方改革を踏まえた機能的・効率的な学校運営による組織力の強化

## 4 前年度の成果と課題

- ①「グローバル教育」、「地域との連携」、「校内美化」については高い評価が得られた。特に「グローバル教育」、「地域との連携」については学校目標の一翼を担っており、今後もなお一層の活性化を図っていく。昨年からの新しいグランドデザインの策定が終わりその指針に従って中高一貫教育を推進していく。また、中高相互授業参観や中学校からの教科担当者会議への出席など、昨年始めた取り組みを継続していく。
- ②進路実績については、国公立大学140名の合格と中高一貫校になってから2番目の数となり、最後まであきらめない姿勢が実を結んだ。しかしながら超難関大の東京大学や京都大学には合格者がせず、医学部医学科の合格も1名であり、上位者の指導に課題を残した。
- ③ICT利活用教育については、生徒の満足度は高く、電子黒板を使っての授業も定着した。学習用PCの活用については、学習支援プラットフォームのClassiを導入し、授業以外でも生徒の学習活動を支援していく。生徒の主体的な学習の推進については、取り組みに教科間のばらつきが大きく、学校全体としての取り組みが課題となっている。
- ④毎年多くの生徒がボランティア活動や留学・海外との交流事業等に参加している。昨年度は13名の生徒が海外に派遣され、県や関係機関の代表として活躍してくれた。また、武雄市の街づくりプロジェクトにも多くの生徒が参加し、行政と学校との協働企画として内外から高い評価を得た。また佐賀を誇りに思う教育では武雄市長にご講演いただき、郷土愛の醸成ができた。
- ⑤様々な価値観や適性を持った生徒があり、困り感の強い生徒や特別に配慮を要する生徒については可能な限り個々に対応してきた。担任や学年主任、教育相談の担当はそれぞれ誠実に対処してきたが、組織的な対応については整備を急がねばならない。外部機関との連携ももっと広げる必要がある。
- ⑥武雄高校だより・図書館だより・保健だよりなど広報紙での広報活動は予定通りできた。今後はHPとプレスリリースの積極的活用が課題である。また、PTA総会の出席率が約50%と低く、出席率向上のための工夫が必要である。本年度は創立110周年の記念式典が行われるが、これを機に本校の魅力をもっと知ってもらうように広報活動を活発に展開していかなければならない。
- ⑦県教育委員会が主催する各種研修会に多くの教職員が参加し、研修の成果を上げた。また、先進校視察により大いに刺激を受けた。若手の教職員も多く、ベテラン・中堅の教職員が若手の教職員を育成する体制作りが必要である。職員一人ひとりの校務の量的な負担軽減を目指し、かつ校務の効率化のために部活動の活動時間や課外活動の精選や縮減、校内の組織や会議の見直し、校務や学年団の組織的な運営を必ず実践し、それが学校運営の活性化に繋がるよう工夫を重ねていく。

## 5 総括表

### ①高い志を抱いた生徒一人ひとりの能力・個性を伸ばし、継続性を持った中高一貫教育の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策
特定課題	○中高一貫	併設中学校との連携を進めること	・中高教師間の連携を深め、教育力を高める。 ・中高生徒間の交流を深め、一体感を持たせる。	・教科別に中高で互いの授業を参観し合い、授業研究会を実施する。 ・高校の教科担当者会議等に中学校職員にも参加してもらう。 ・中高生徒の各種行事・部活動での交流機会を設ける。 ・中高一貫教育の新たなグランドデザインの構築を併設中学校と共に実行する。

### ②基礎から応用までの教科指導の充実や、生徒が深く考える活動を通しての進路目標の実現

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
特定課題	○進路指導	中高一貫6期生としての自覚と進路第一希望の達成	・一人ひとりの生徒が適切な進路選択ができ、その進路実現のための支援を行う。 ・3年国公立大学合格者150名以上、うち難関大学合格者30名以上、国立大学医学科複数名。	・1年次より教科担当者会議を計画的に行い、3年次の進路検討会へと繋げ、3年間を見通した指導を行う。 ・進路講演会、職員研修会等を行い、生徒の意識向上および職員の授業力向上を図る。 ・文理分け、コース分けのための情報提供を行い、指導・面談の充実を図る。 ・難関大学希望者への個別指導を、早い時期から実施する。 ・短大・専門学校・就職希望者には個別に対応する。
教育活動	●学力向上	教職員の指導力向上	・基礎的レベルから応用・発展レベルまで対応できる指導力を身につける。	・大学入試問題研究等の実施によって、より実践的な知識と技能を身につけ、日常の授業への応用を図ることにより、授業内容の改善に取り組む。 ・校内の入試研究会や教科の講習会等に積極的に参加し、入試問題や入試動向等の研究を行う。
		生徒の実力養成	・全国模試総合偏差値60以上を各学年110名以上にする。	・学習時間調査、進路希望調査の実施や、「学習と生活の記録」を活用し、生徒の日々の生活状況を把握し、指導に活かす。 ・職員研修の充実による教員の授業力向上を図る。 ・模擬試験を受け、教科担当者会議を実施し、結果の検証、見直し、設定をする。
		「探究Ⅱ」の工夫と校外体験活動の奨励	・進路達成に資する各学年ごとの「探究Ⅱ」を計画・実行する。 ・年間50件以上の校外活動を紹介・募集し、のべ150人以上の活動体験者を出す。	・探究Ⅱ委員会または企画研修部会で、各学年の探究Ⅱにおける活動内容を検討し、必要な修正を行う。探究活動（進路研究、協働学習、ディベート、小論文指導等）を充実させる。 ・募集中の校外活動についてポスターや教室掲示で生徒に案内する。また、活動への参加目的が明確になるよう参加報告書を書かせ、事前事後指導を行う。校外活動体験発表の場を設け、また文書による報告を行い、経験を共有させる。

### ③アクティブ・ラーニングやICT利活用を手段とし、主体的な学習活動ができる授業の推進

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICT利活用教育に対する生徒の満足度を高める（肯定的評価90%以上）。	・電子黒板や学習用PCを全教科で活用し、効果的な授業実践を行う。 ・自宅での学習用PCの利用を促す。	・電子黒板や学習用PCの授業における活用状況を調査する。 ・各教科で電子黒板や学習用PCを活用した研究授業を行い、より効果的な活用を検討し実践につなげる。 ・授業以外での学習用PCの活用を推進する。 ・自宅での課題状況を把握できるソフトも利用し学習用PCの利用を推進する。
	○主体的で効果的な学習活動のためのアクティブラーニングの積極的導入	授業への導入を促進し、かつ、その検証と研究をおこなう。	・個人、グループで考えをまとめさせ、自分の考え方や行動についても考えさせるなどの活動を授業に取り入れる。	・各教科でアクティブラーニングを取り入れた授業研究会を行う。 ・中高合同授業研究会でアクティブラーニングを取り入れた授業の研究を行う。 ・1、2年生の探究においてアクティブラーニングを取り入れた活動を行う。
学校運営	○教育情報支援システム(SEIネット)と学習用PC導入への対応	教育情報支援システム(SEIネット)と学習用PCの効果的な活用方法を工夫する。	・SEI-Netの効果的な活用法を確立する。	・県教育情報課やSEI-Netヘルプデスクとの連絡を密にし、出席統計・成績処理について導入の方向で進めていく。 ・SEI-Net活用のための職員研修を実施する。

#### ④佐賀を誇りに思う教育やグローバル教育の推進による、地域や国際社会の発展に寄与できる人材の育成

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
教育活動	○佐賀を誇りに思う教育の実践	佐賀の歴史や伝統、産業や技術を尊重しつつ、次世代につながる魅力あるふるさと作りに貢献できる教育の実践	・地域の文化への関心を高める。	・講演会を実施し、佐賀の魅力を再確認することで、他の様々な文化への興味や関心を高める。 ・朝の自習時間を利用し、1年次に書籍「佐賀語り」をとおして佐賀のことを学ぶことで、「ふるさと佐賀」に対して誇りと自信につながる見識を深める。 ・2年次は昨年度に引き続き、書籍「佐賀語り」をとおして佐賀のことを学び、生徒各自で県のPR・ポスター等をデジタルデータで作成し、優秀作品を文化祭で展示する。
	○更なるグローバル教育の充実	グローバルな視野に立ち、世界で活躍できる人材の育成を目指した教育活動の実践	・生徒のグローバルな視野を広げるような授業や教育活動を実践する。 ・社会課題に対する関心を喚起し、コミュニケーション力や問題解決力を育む教育を実践する。	・国際理解教育講演会を始めとする諸活動の計画、実施を通して、本校独自のグローバル人材像やグローバル教育について職員のコンセンサスを図る。また、それぞれの教員がグローバルな視野に立った授業を心がける。 ・佐賀大学留学生等との国際交流や、中高合同の海外研修などへの積極的な参加を促し、生徒が国際理解を深めることのできる機会を多く提供する。「探究Ⅱ」や日頃の授業を通して自分で問題解決を図る姿勢を身につけさせる。

#### ⑤様々な教育活動や生徒支援による、心身の健康の増進と豊かな心や想像力の育成

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
教育活動	○生徒指導	規範意識の向上	・規則の遵守、防犯安全に対する意識を高める。 ・生徒指導措置件数0、加害としての交通事故件数0に努める。	・日々のホームルームや集会等を利用して、道徳やマナー・交通安全・情報モラル・人権意識等についての啓蒙を行う。 ・毎月、定期的に服装頭髪検査を実施し、武雄高校生としてふさわしい身なりを意識づける。 ・警察や県生徒指導連盟からの情報提供を参考にプリント・ポスター等で防犯意識を高める。
		部活動の活性化	・部活動を通して、体力・忍耐力・協調性を養い、連帯感を身につける	・他の校務分掌や生徒会等と連携しながら、生徒の能力・適正・興味・関心等に応じた活動を行う。また、家庭や地域社会の教育力や支援をうけながら積極的に活動を展開していく。
	●心の教育	思いやりの心の育成	・ホームルーム活動や校外活動を通して、他者への思いやりの心を育てる。	・ホームルーム活動の時間に具体的なテーマを設定して考えさせる。 ・校内外におけるボランティア活動やイベント等の個々の活動の意義を明確にし、また関連するさまざまな情報を提供して、生徒の参加意欲を引き出す。 ・武陵祭でのクラス企画などグループ活動を通して、助け合いの心を育む。
		困り感のある生徒への対応	・カウンセラー利用の呼びかけや保健室利用の生徒の把握を行い、早期の対応を行う。	・スクールカウンセリングの活用や教育相談連絡会、特別支援委員会を通して職員間の共通理解を図り、生徒が円滑に学校生活を送ることができるよう方策を図る。 ・シェアリングシートを活用し、生徒の休み状況を共有する。
	●いじめ問題への対応	いじめのない学校づくり	・早期発見に努めるとともに、認知事案に対しては早期解決に努める。	・学校行事や部活動において、生徒自身が集団との一体感を持つ取り組みを工夫することでいじめのおこらない雰囲気を醸成する。 ・「いじめはどの学級でも、どの生徒にも起こり得る」という観点を常にもち、日々の観察、学校生活アンケートの活用、面談等より、いじめの早期発見に心掛け、いじめが認知された時は組織として迅速に対応する。 ・心の教育をとおして思いやりの心を育成する。
	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・校内環境美化に努める。 ・健康診断を有効に活用し、健康な体づくりに努める。	・学校全体でゴミゼロ運動を取り組む。 ・健康診断後の治療勧告書や、保健だよりを通じて、健康な体づくりを目指す啓蒙活動を行う。 ・部活動をとおして心身の健全な発達を促す。
		学校保健教育の推進	・早期対応に努め、心身の健康相談活動を強化する。	・内科的訴えに対応するため、相談時間を確保する。教育相談係を中心にスクールカウンセラーを活用する。学年団や専門機関との連携を図る。 ・「保健だより」を通して、時期に応じた内容の記事を掲載し、啓蒙活動を行う。
	○図書館教育	望ましい読書習慣の育成	・生徒の読書量と質を向上させ、一人あたりの年間貸出冊数4.0冊以上、貸出総数3,000冊以上を目指す。	・朝の読書、LHRでの一斉読書（クラス読書会）、学級文庫の活用等を通して積極的な学級図書館の利用を推進する。 ・「図書館だより」を通して、新着図書、お薦めの本の紹介等の情報発信を積極的に行う。 ・生徒たちの教養や知識の水準を上げるような本の提供を行う。

#### ⑥保護者や地域との連携を深め、広く共感と信頼を得られる学校づくりの推進

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
学校運営	○学校運営方針	本年度の重点目標の周知	・重点目標を知っている保護者の割合を80%以上にする。	・PTA総会において、学校評価計画を示し、本年度の重点目標について十分な説明を加えることで周知を図る。また、学年保護者会・学年通信・広報紙及び学校のホームページを通して、随時周知を図る。 ・生徒にも重点目標をしっかりと周知し、学校全体で目標達成に向けて取り組む。
	○開かれた学校づくり	PTA総会や学年保護者会の充実	・PTA総会への保護者の出席率を65%以上にする。	・ホームページを利用して事前の広報周知を徹底する。 ・総会の進行を効率化し、学年・担任との懇談が十分確保できるよう工夫する。 ・当日参加できなかった保護者のために、後日報告会設定し、総会での内容を報告する。
		中学生体験入学の充実	・体験入学の出席者数を募集定員の200%以上にする。	・早めに計画を立て、中学校に案内を出す。 ・ホームページを利用して事前の広報周知を徹底する。 ・内容を工夫し、中学生の興味関心を高める。
		情報発信の推進	・広報誌「武雄高校だより」を年12回以上発行する。  ・ホームページの更新を頻繁に行う。 ・スクールNewsを活用する。	・近隣の中学生全員の他、教育事務所や教育委員会にも配付する。 ・ホームページを利用して広報を徹底する。 ・在校生だけでなく中学生の興味も引くよう、内容を工夫する。 ・プレスリリースを積極的に行い、対外的な情宣活動に取り組む。  ・生徒の活動状況だけでなく、保護者向けの文書などもアップする。 ・緊急情報等はWeb配信・メール配信も活用する。
教育活動	○地域との連携	地域との協働活動の推進	・地域の魅力を理解し、地域の将来を考える力をはぐくむ。	・武雄市との連携を深め、地域のリアルな課題をもとに現状を探る。また、地域の課題解決に向け魅力あるプランを創造的に組み立てることができるように総合的な学習の時間等を利用する。 ・武雄市のまちづくり参画事業などの地域との協同活動の報告会を行い関心を高める。

#### ⑦教職員の指導力向上、働き方改革を踏まえた機能的・効率的な学校運営による組織力の強化

領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策
学校運営	○教職員の資質向上	学問への興味を喚起させ、学力をつける授業の実践	・教科の専門性を高め、奥行きのある授業の実践に努める。 ・指導方法の改善に取り組み、わかりやすい授業の実践に努める。	・県教育委員会主催の「大学受験指導力向上研修会」や「民間教育機関（予備校）への教員派遣事業」などへの積極的な参加を促し、個々の教師の指導力向上を図る。 ・各教科において、電子黒板や学習用PCの効果的な活用をとおして生徒の興味関心を引き出し協働学習やアクティブラーニングにつながる学習活動の工夫を図る。 ・研究授業の実施や参観の機会を増やし、指導方法の改善に役立てる。 ・生徒による授業評価の結果をそれぞれの授業改善に役立てる。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	機能的・効率的な学校運営による組織力の強化	・機能的で効率化を目指した職場環境の整備に努める。 ・具体的な時間的、量的負担の軽減を全員で取り組む	・週休日の部活動の練習時間の削減、休養日の設定を確実なものにする。顧問の交代での指導。 ・出張用務の精選。会議時間の短縮化。校内メールやメッセージ機能での情報の共有。 ・閉庁日の設定や校内LANの稼働時間の短縮。 ・分掌組織の改編。業務分担内容の見直し。
	○教育環境の整備	施設・設備の充実、効率的な予算の配分・執行	・安全な学校施設、学業に専念できる学校環境づくりに努める。 ・適正な予算の執行に努める。	・定期的に点検を行い、該当箇所の早期発見に努め対応に当たる。また、情報共有のため職員間での連絡を密にする。 ・本校の長年の懸案事項であった「南体育館全面改築」に向けて、早期実現ための要望や協議等を関係機関に働きかけていきたい。 ・限られた予算のなか、各事業内容を精査し有効な予算執行に努めたい。